

築堤にまつわる妖怪伝承にみる土木技術者についての民俗研究
A study on civil engineers in the folklore of yokai associated with embankments

中尾聡史
Satoshi NAKAO

In this study, folklore research about civil engineers in Japanese history were surveyed in terms of kappa and oni, including research performed by Itsuo Wakao, who is a pioneer of Japanese non-agricultural culture research. First, folklore studies on civil engineers were reviewed. These studies suggest that civil engineers were categorized as nonfarmers, which also included other groups of people such as vagabonds and social outcasts. As non-farmers, these people have not been the main subject of Japanese folklore studies. Second, it is indicated that the folkloric fact that civil engineers called “kurokuwa” who performed public works based at riverside, could be the basis of the kappa stories. Third, existing legends about the exterminations of oni were reviewed, which suggest that mineworkers, who were categorized as non-farmers, were called oni. Certain mining technologies were diverted into tunnel mining in gorobe irrigation channels, which falls under civil engineering. Through these reviews, this research indicates the possibility of civil engineers being called kappa and oni.

1. はじめに

東京都浅草にある曹源寺に河童が築堤を手伝ったという次のような伝承が残されている。

「今から 160 年前ほど前の文化年間のころ、この一帯は、水はけの悪い土地でたびたび出水を起こしていた。そこで、合羽川太郎（本名：合羽屋喜八）は、私財を投じて排水工事に着手したが、工事はことのほか難航した。昔、川太郎にたすけられたことのある隅田川の河童たちは、これを見ていたく同情し工事を手伝ったおかげで、掘り割り（当時は新堀川と呼ばれた）は見事に完成した。」

このように河童などの妖怪が土木工事に関わるという伝承は浅草だけでなく全国各地に残されている。こうした妖怪が築堤などの土木工事に関わるという話は、荒唐無稽の単なる作り話であろうか。本研究では、土木工事に関わる妖怪伝説の歴史背景について、民俗学の視点から考察を行った。

2. 民俗学における土木技術者の位置づけ

日本民俗学には、その創始者である柳田国男が考案した「常民」という概念がある。「常民」とは、平地部に定着し、水田稲作に従事する農業民のことを指す。

一方で、定住をせず、各地を放浪し生計を立てた人々も存在した。家財道具を背負い集団で山間水辺を漂泊し、箕づくりを生業としたサンカ（山窩）や、山中において轆轤をひいて器を作り、良

材がなくなると他に移動して生計を立てた木地師などがこれにあたる。常民の世界の外には、特殊な技術をもった漂泊の民がいたのであり、民俗学では、こうした人々のことを常民と対比して、非常民と呼んでいる。

初期の柳田民俗学においては、『遠野物語』『山の人生』に代表される山人などについての非常民に関する研究が行われていた。そして、この非常民の研究の一つである『毛坊主考』において、柳田は、中世における漂泊の民が、井戸掘りや池作りなどの土木技術を携えていたことを示唆している。中世における築堤などの土木工事は、常民の農業技術の応用で実行できる段階をはるかに超えており、土木を専門とする非常民集団の活躍があったことが歴史学の分野からも指摘されているところである。

文化人類学の立場から民俗学に接近した小松和彦は、定住民である常民にとって、彼らの世界の外部に住み、様々な機会を通じて接触する非常民は、異人視される立場にあるとの見解に立った上で、異人である非常民の存在が妖怪にまつわる民話を創り出す一つの大きな基盤になっていると指摘している。そして、小松は、妖怪の中でも河童に関する民話には、土木事業に実際に関わった非常民の姿が暗示されていることを示唆している。

3. 河童と土木

折口信夫は「河童の話」として、土木工事で働かされた人形が、工事が終わると放たれて、「があたり」すなわち河童になるという話を紹介している。土木工事の際に働かされた人形の成れの果てが河童であるという民話は、柳田によっても記録されており、全国各地で採集されている。このように、曹源寺の河童と同様の話が日本全国に残されているのである。

児童文学作家の松谷みよ子は、岸和田市の久米田池で、行基による堤防工事に土人形が手伝ったという伝承を採集し、今なお、土人形の子孫と呼ばれる人々が、堤防近くに住んでいることを発見している。また、若尾は、「ミズチが行基のつくった藁人形から発達し、天竜川の河原に住んでいる」という伝承をとらえ、河童とはまさに、「川小僧」と呼ばれる漁業や土木に関わった人々のことではないかと指摘している。歴史実証は難しいが、伝承によれば、河原町の名のつく町は、土木技術者が住む、または土木技術者に関わる町であるらしい。

つまり、河童の伝承は、土木技術者がかつて河原を中心にして活躍していたことを物語っていることが考えられる。実際、曹源寺の周辺は沼地のような地域であり、黒鋸組の屋敷が存在することが、江戸時代の地図から確認できる。

4. 鬼と土木

築堤と鉱山開発では、おなじ尾張鋸という名の鶴嘴形の工具が使われ、土木技術と鉱山技術には通底する部分が少なくない。土木と鉱山技術の関係について、宮本常一は次のように述べている。

「中国山地とか中部地方の山中には黒鋸師というのがおったんです。黒鋸師というのは鉄山とか銅山で働いておった人です。中部地方の西部、つまり美濃の国、越前の国、そのあたりは金がたくさん出ましたし、銅がでました。それを掘るために黒鋸師が出てきたわけです。その人たちが、やがて銅が出なくなったときに平野へ下ってきて、いろんな土木工事をやるようになります。濃尾平野にたくさん川が流れておる。そうして見事な堤防が残っておる。自分らの村を守るために、輪中と言われる堤防が、多いときには二〇〇を超えるほどあったのですが、それを築いたのはじつは黒鋸師です。それがひとつの景観をつくり出していった。」

このように鉱山師のもつ鉱山技術が土木技術に

も転用されてきた。鉱山開発では、坑道の中に落盤を防ぐ井桁を組むが、その技術と堤防の杭打ちに関連した技術がありそうである。事実、信州佐久高原の五郎兵衛新田の隧道開削(トンネル工事)に、鉱山師が活躍していたことが言われている。また、築堤と鉱山開発では、おなじ尾張鋸という名の鶴嘴形の工具が使われるように、土木技術は、鉱山技術と類似点が多い。つまり、土木技術者は鉱山師でもあり、鉱山師は土木技術者でもあった。こうした特殊な技術を持った非常民は、需要に応じて飛び回り、井戸や隧道を掘ったり、堤防を作ったり、さらには鉱山開発にも関わったのであろう。そして、この鉱山師は「鬼」と呼ばれていたことが、若尾五雄によって明らかにされている。若尾は、鬼伝説が語られる神社仏閣や鬼の名前がつく地には、鉱山跡やたたら跡があることを、丹念なフィールドワークを通して発見し、鬼とは、金、銀、鉄を掘り起こす鉱山技術を持った鉱山師やたたら師であることを説いている。

これらのことから、鬼と呼ばれた鉱山師が土木に関わっていた可能性が考えられるが、本研究の調査によって、九州地方を中心に鬼が石段を築いたという伝説が、石段とともに残されている地域が幾つか存在することを確認した。青森県弘前市鬼沢には、鬼が築いたとされる堰が現存している。重要なのは、鬼沢のすぐ西にある岩木山には、他にも鬼伝説が残されており、数多くの製鉄遺跡も発見されていることである。このことから、鬼神堰を築いた鬼が、岩木山の製鉄に関わっていた人々であることが推察される。その証拠に、鬼沢の鬼神社には、鋸などの鉄製の農工具が飾られている。このように、土木に関わった鉱山師の姿を暗示する鬼伝説が日本全国に存在するのである。

6. まとめ

本研究では、民俗学のこれまでの知見を整理し、鬼の伝説を調査することを通じて、妖怪が築堤などの土木工事に関わったという伝説の背後にある土木技術者の姿について論述した。

まず、民俗学での議論を整理しながら、土木技術者が、定住農業民(常民)ではなく、非常民として位置づけられることを指摘した。そして、河童の伝承には、河原に住む土木技術者の姿が暗示されていることを指摘した。また、鬼の伝説には、土木工事にもかかわった鉱山師の姿が描かれていることを示唆した。